

司会：今日は、お忙しいなか、現代女性キャリア研究所のシンポジウムにお集まりいただき、ありがとうございます。司会を担当いたします、研究員の三具と申します。

本日のテーマは、「男性がケアを抱えるとき—女性労働を支えるもう1つの観点」です。女性が抱えてきたケアの問題を、男性が抱える立場になったとき、どういったことが起こるのでしょうか。女性の労働活躍推進について盛んに言われている昨今ですが、なかなか推進というところまでは到達せず、いろんな議論がされていることは、ご承知と思います。そのような現状を踏まえ、本日のシンポジウムは、これまで女性労働が推進されなかった点に、別の角度からアプローチすることで、女性労働活躍推進の陰にある問題を明らかにする、という機会にしたいと思っております。

全体の流れを簡単にご説明します。本日のプログラムは2部構成です。第1部は、天田城介先生による基礎講演です。第2部では、ケアラーとしての男性の今、について、土堤内先生、平山先生、永井先生、お三方からご報告をいただきます。最後は、先生方を囲んで、50分間のパネルディスカッションを行います。ご講演やご報告に関するご意見やご質問は、この時にいただきたいと思います。

それでは、天田城介先生から基調講演をいただきます。

第一部「男がケアをするということ——

社会関係のメンテナンス・コストのジェンダー非対称性をめぐって」

基調講演

天田 城介

男がケアをすること

天田：ただ今、ご紹介にあずかりました、天田と申します。専門は社会学ですが、医療や福祉や労働などのテーマについて社会的に考えてきています。

本日の講演では、できるだけ当事者の視点に立ってお話をしてほしい、というご依頼を受けましたので、まずは、私のケア歴を少しご紹介させていただきたいと思います。

私にとってケアと呼ぶべき最初の経験は、中学校に上がる前ぐらいに祖母が認知症になったため、以来約15年間、祖母の傍にしながら介護をサポートしてきました。また祖母の介護をしてきた経験があったからでしょう、大学と大学院修士課程の6年間、都内にある大学病院で夜間の看護助手をやっていました。このような経験がきっかけとなり、医療、福祉、労働などの領域で社会学をやろうと思うようになりました。老い衰えていくなかで当事者はどのような現実を生きているのか。あるいは、ケアする側とケアされる側とのコミュニケーションにおいてどういった問題が生じてしまうのか。加えて、最近では、戦後の日本における労働を含めた生存を保障する仕組みがどのように形成されてきたのかといったことも考えています。私たちはどうやって暮らし、生きていくことができたのか、それを可能にしたのはいかなるシステムであったのか——私はこれを戦後日本型生存保障システムと呼んでいます——といった歴史研究・制度分析などを、当事者の視点か

ら行うことを心がけてきました。

現時点では、子育て当事者となりますでしょうか。3人の子どもの父です。上から中学校2年生、小学校5年生、小学校3年生です。一番上の子が14歳になりますので、育児歴は14年といったところです。先ほど申し上げたとおり、1980年代前半から1997年までは認知症の祖母の介護をサポートしており、1991年～1996年の間は、介護をしながら大学病院の看護助手として働きました。97年に祖母が亡くなり、また私自身は日本学術振興会のお陰で研究をしながら暮らしていけるようになったので、いったんはケアの場から離れていました。しかし、2000年になると長男が生まれ、2003年には長女が生まれ、2005年には次男も生まれました。育児と介護などを総称して「ケア」と呼ぶのであれば、ケアに関わっていなかった時期は97年から2000年の3年間だけです。その意味では、自分ではほとんど意識したことはありませんでしたが、ずっと何らかのケアに関わっていたり、傍らで常に見たりしてきたということになります。

私の経験から言うと、子どもがまだまだ小さいうちは、食事を作ったり、洗濯をしたり、掃除をしたり、買い物をしたり、保育園などにさまざまな連絡をしたり、最小限の子どもの友だちづきあいをしたり、風邪を引けば病院に連れて行ったりといった身体的なしんどさがあったのですが、子どもが小学校高学年になれば、この嵐のような時期を過ぎて、ずっと楽になるだろうと思っていたのです。ところが、じっさい小学校高学年になってみると、確かに身体的には楽になったのですが、子どものさまざまな付き合いを保つために連絡を取り合うなどの「社会的なインターフェース」は逆に増大しました。例えば、子どもがスポーツのクラブチームに通う、小学校の部活に入る、学校行事に顔を出す、学校の先生と連絡を取り合う。あるいは、PTAや自治会の役が回ってくる、通学の旗当番をやらなければならない、などです。夫婦だけで家事と育児などのケアワークを分担していればよかった状況から、子どもの社会関係を保つためにさまざまな人との付き合いが生まれたのです。私は、こうした社会的なインターフェースを持ち、維持する行為を「社会関係のメンテナンス」と呼んでいますが、「ケアすること」には家事や世話や育児や介護のみならず、こうした社会関係のメンテナンスが求められます。加えて、習い事や学校の諸連絡、子どもの友だちの保護者との連絡、地域での役割や諸連絡など社会関係のメンテナンスのみならず、育児でも介護でも何らかのサービスを利用すればそのサービス関係者と本人のために各種連絡を取りあうことが必要になります。そうした社会関係のメンテナンスが小学校高学年になってから増え、負荷がかかってくるがありました。

今日の報告では、ケアをめぐる社会関係のメンテナンス・コストが、男性と女性では圧倒的に非対称的ではないだろうか、「男性がケアすること」を考えるのであれば、この社会関係のメンテナンス・コストのジェンダーの平等をいかに担保するのかの設計思想を思考しなければならないことをお話します。後ほどご紹介するケースでは、いずれの男性も積極的に家事と育児に参加していますが、子どもの保護者や地域と連絡を取ったり、子どものクラブチームの当番やお手伝いに行ったり、親戚同士の関係がうまく保たれ

るようにメンテナンスをすることについては、圧倒的に女性が担っています。しかも、男性にとっては、この社会関係のメンテナンス・コストは、ほとんどケア・コストとして換算されていないのではないのでしょうか。結論から申し上げますと、共働き家庭で、一見男性が積極的に家事や育児を担っている家庭であっても、ケア・コストにおいては、圧倒的な非対称性があるのです。本日の講演では、こういったことをお話していきます。

余談になりますが、私はちょうど昨年度、カリフォルニア大学バークレー校で客員研究員をしていました。とても充実した時間で、育児も本当に楽しかったです。アメリカにもジェンダーによるケアの非対称的な部分がありますが、男性もケアをめぐる社会関係のメンテナンス・コストを担っている。例えば、息子がサッカーのクラブチームに入ると、出欠席の連絡、試合に用意すべきものや集合場所の地図をメールで送付するなどの諸連絡や、車で一緒に乗り合わせて行くなどの調整はほとんど父親同士で行っていました（チームのマネージャーも父親が担っていました）。また、アメリカでは、“バル・ミツワー Bar Mitzvah” という 13 歳を記念して行われるユダヤ教徒の成人式があるのですが、子どものためのパーティに友だちやチームメートを誘うのも父親が中心にやっていました。ラティーノのチームメートが子どもの誕生日パーティなどを開催した時にもお父さんが中心にホスト役をしていました。もちろん、学校での友人宅にハロウィーンのパーティなどの誘いの連絡などは母親がしてくれることも少なくないですが、ジェンダーの差異を大きく感じることはありませんでした。その意味で、子どもたちの社会関係を良好に保ち、メンテナンスをするうえで、男女（父親・母親）をほとんど意識することなく、楽しい時期を過ごしました。ところが、日本に帰ってくると、社会関係のメンテナンスを担っている大多数が女性であるため、私が関係を取り持つには、圧倒的な少数派として関わらざるを得なかったのです。今日はお話できませんが、アメリカでもケアにかかわるジェンダーの非対称性がありますが、少なくとも私たちの社会よりは、ケアにかかわる社会関係のメンテナンスをバランスよくやっているところがあるように思います。その意味では、何ごとにも私たちの社会はジェンダーの障壁が圧倒的に高く、非対称であるといえます。

私の知人・友人たちにも、共働きで積極的に育児をする男性は多いですが、話を聞けば聞くほど、夫婦間で多くの亀裂・軋轢が生じていることが分かってきています。親しくしている友人のところでは、夫に対する妻の不平・不満がなぜか私の方に投げかけられます。「この人は、家事や育児をしていればいいと思っていて、それ以外のことにはほとんど気付いていないし、目がいていない」といった具合です。このように、家事以外の負担についてほとんど意識していない、という様子が多くみられました。

これまで一般的に「育児」は「世話」「しつけ・教育」「遊び」の 3 要素から構成されると指摘されてきましたが（大和礼子「“世話／しつけ／遊ぶ”父と“母親だけでない自分”を求める母」大和礼子・斧出節子編『男の育児・女の育児——家族社会学からのアプローチ』（昭和堂、2008 年）所収など）、実は「育児」の範囲は膨大で、学齢期の子育ての段階でも、家族のための食事・洗濯・掃除・買い物にとどまらず、勉強机をいつどこに

配置するか、小さいうちはダイニングテーブルなどで勉強させようかといった設定をはじめとする各種の「子どもの家庭環境の設定」もあります。また、「家計や教育費の設計・運用」。風邪を引きやすいので市販薬を事前にドラッグストアで買っておく、病院に通院の際の連絡・送迎などの「家族の健康栄養管理」もある。翌日の時間割を揃えたか確認する、学習の面倒をみるといったことのみならず、参観日や保護者会の確認、PTA や自治会の当番や役割を担ったりその諸連絡であったり、「子どもの学校関連業務」もてんこ盛りです。また、クラブチームや学習塾などへの参加や連絡といった「習い事関連業務」。さらには、親戚や近隣や子どもの友人・知人の保護者等との付き合いを良好に保つなどもある。こうした“見えやすい”食事・洗濯・掃除・買い物以外の、“見えにくい”社会関係を保つためのコスト意識は、私の友人・知人でさえも希薄で、そのことが“喧嘩の火種”になるとか、コストに対する意識“のズレが、お互いのコンフリクトの“引き金”になっていることも少なくありませんでした。夫の能天気で何気ない振る舞いが“地雷を踏む”、ということもしばしばあります。

本日は時間が大変限られていますし、ケアとジェンダーについては既に優れた研究がございますので（春日キスヨ『介護とジェンダー——男が看とる女が看とる』（家族社、1997 年）、『変わる家族と介護』（講談社、2010 年）など）、今回は「ケアをめぐる社会関係のメンテナンス・コストにおけるジェンダーの非対称性」に限定してお話をしたいと思います。また第 2 部のシンポジウムにつなげる意味でも、今回対象とする「ケア」はあえて「子育て」と「介護」にあえて限定した上で、40 代から 50 代の男性が父親としていかに子どものケアをしているか、あるいは、息子としていかに実父母をケアしているか。この 2 点についてジェンダーの視点から分析したいと思います。

なお、育児インタビュー対象者は 2 組です。どちらも小学校高学年の子どもを持つ共働き家庭です。夫が会社員、妻が看護師としてパートタイム労働をしている A さん家族と、夫婦ともに会社員の B さん家族の 2 組です。便宜的に夫の方を A さん、B さんとしておきます。どちらのケースも、夫は子育てを積極的に行っていると認識しており、ともに男の子と女の子の 2 児がいる家庭です。

そして、今回紹介する介護インタビュー対象者は 1 組です。現在、息子として実母を介護している 50 代の男性家族です。夫を C さんとしします。C さんの子どもは既に成人しており、社会人として他県に在住しています。

本来は、このインタビューから、片働きか共働きか、家事・育児をどのくらい担っているか、子どもが複数なのか 1 人なのか、あるいは所得階層や夫婦間所得格差、妻に仕事があるかないかなど、様々な条件によって、それぞれの家族のケア・コストのジェンダーの非対称性は異なるということもお伝えしたいのですが、本日のお話では、前半に、子どもが 2 人いる共働きで夫が家事・育児などを比較的積極的に分担しているケース、後半に、夫が主たる介護者として実母を介護しているケースを事例として紹介しつつ、いくつか論点に限定して指摘させていただくことで、ケアをめぐる社会関係のメンテナンス・コ

ストのジェンダー非対称性について考えていきたいと思っています。ただし、ご紹介する事例はあくまで限定的に選択したケースですので、これらのケースに限って言えることもあると思います。

父親は子育てをめぐる社会関係のメンテナンス・コストを担おうとしない

最初に指摘したいのは、父親が子育てをめぐる社会関係のメンテナンス・コストを担おうとしないことが多く、妻は、面倒なことを任せてくる夫に苛立ちを感じていることが少なくないという点です。まずはAさんの場合です。Aさんの妻は夫について、次のように言っています。

「夫は、周囲に比べれば家事や育児を一生懸命しますが、肝心なところは私任せです。PTAや通学の旗当番などはすべて私がやっていますし、子どもの友だちのお母さんとのメールやLINEでのやり取りなどもすべて私です。確かに、夫が子どもの友だちのお母さんとメールやLINEをするのは相手も嫌がるでしょうから、私しかできませんし、学校関連の連絡も地域の母親から私のところに連絡がありますから、仕方がない部分もありますが、当然のような顔をされると頭にくるんです」。

他方、夫であるAさんは、こう言います。

「妻はジャンケンで負けて学級委員会の役員になったので、委員会に参加しなければならなくなりました。ところが、委員会では、フェスティバルの景品が駄菓子では保護者のクレームが入るとか、（フェスティバルの際に子どもが歩く）順路を示しておく必要があるとか、どうしてもよいことを朝から話し合い、予定時間が過ぎても終わらないとか何とか（妻から）聞かされたので、『仕事があるから失礼します』と言って帰ってくればいいじゃないか、と言ったのです。すると、『委員長のお〇〇さん（子どもの友人の母親）に迷惑がかかる』とか何とかで、結局、解決しない。そんなこんなで、妻が（自分に）キレル」と語る。

Aさんの妻が言うように、Aさんは「家庭内では家事も子育てもやる」が、小学校に入学すると学校や習い事関連で、「主婦を前提とした付き合い」に関わる機会が増大する。つまり、家庭内ではうまく分業が担えるケースでも、子どもが大きくなればなるほど社会とのインターフェースが増大してくるため、子どもの社会関係のメンテナンス・コストを保とうとすると家族外部のジェンダーの構造に巻き込まれていくという状況が生まれてくるのです。

妻もそんなことに関わるのは面倒・厄介だと思いながらも、社会関係をメンテナンスするためにもそれなりの対応をせざるを得ない。「主婦を前提にした付き合い方」であるがゆえに、夫も参加したがいらないし、周囲もそれを期待も予期もしていない。このように、家庭内では夫婦で分担できている家事や子育てが、外部との付き合いではうまく分担できなくなっていく、という側面があるのです。

次はBさんです。Bさんの妻は次のように言います。

「子どもが仲良くなった友だちと塾に行きたいと言い出して。夫に相談をしても、『まだ必要ないのではないか』の一点張りで、結局、どういった塾であるとか、バスは出ているとか、帰宅は何時になるとか、宿題は出るとか、クラスの雰囲気とか、体験できるかどうか、といったことは、すべて私が知り合いからいろいろ聞いて情報収集をしているのです」。

それに対して、夫のBさんはこう言います。

「(妻は) 娘が〇〇ちゃんと仲良くなっていきたいと言うし、塾であれば親の負担も少ないし、いいんじゃないかと言うんです。子どもを塾に入れている人の話を聞くと、(普段の家庭内での勉強の面倒が行き届かないこともあるので、妻は) どうしようかと迷うらしいんです。そんなときに、娘が『通ってみたい』というのと、『じゃあ、体験してみようか』と。でも、こちらが『今から必要ないだろう』と言うと、カチンとくるらしく、いつもそんな話で喧嘩になります」。

先行研究で知られているように、母親は母親仲間からさまざまな情報を得ているがゆえに、そこでの同調圧力のようなものにさらされながらも、子どもの気持ちを汲んであげたいという思いもあって、「この時期に子どもを塾へ通わせるべきなのか。私のエゴではないか」という不安にしばしば苛まれていることも少なくありません(山根真理「「次世代育成支援」時代の母親意識——母親たちの意識は変わったか?」大和礼子・斧出節子編『男の育児・女の育児——家族社会学からのアプローチ』(昭和堂、2008年)ほか)。しかし、そういった状況であるのにもかかわらず、夫から「それはお前の勝手だろう」と言われると、「傷口に塩状態」になり、妻はより不安を増大化させて感情を爆発させる構造になっている。

Bさんのケースで重要な点は、情報源が夫婦でほとんど共有されていないことです。妻は、母親集団と関係を取らざるを得ないので様々な情報が入ってきますし、その情報のもとで動きますが、夫は、子どもの社会関係のメンテナンス・コストを妻に任せているので、情報が入ってきません。誰が学習塾で習っているか、どのような教え方をしているのか、PTAではどのような運営をしているか、学校の先生がどうであるか、という情報には無頓着なのです。そのように無頓着であるにもかかわらず、夫が「今は必要ないだろう」「それはお前の勝手だろう」などと言ってしまうと、妻はカッとなり、「何もわかっていない」という重いから諍いが起こります。こうした諍いの原因は、夫婦の間で準拠集団が違うところにあります。つまり、妻は、周囲との社会関係のメンテナンス・コストを支払っているがゆえに、母親仲間から子育てに関する情報が入ってくるので、その情報をもとにして夫に相談や提案をするのですが、夫はその集団に帰属していないので、その提案や相談がそれほど意味のあるものだと思えません。すると、結果として、「言いだしっぺがやる」となり、(夫もしぶしぶ手伝いをするにしても) 引き続き社会関係のメンテナンス・コストは妻が引き受けざるを得ない、という状況ができあがっていくのです。

このように、AさんやBさんの家庭で起きていることが、今日ではケアをめぐる社会

関係のメンテナンス・コストをめぐる葛藤と争いとして見られることが少なくありません。学校や習い事での「主婦を前提としたお付き合い」への参入は父親にとって敷居が高いため、結局、母親が引き受けざるを得ないことが多いです。男性が参入する場合も少なくはありませんが、実はこういった場合においても、周囲との人間関係の配慮や、円滑な諸連絡を行うため、母親が情報収集をしながら支えていくことで「それなりにうまくやっている」ことが少なくない。つまり、父親・男性による社会関係のメンテナンスは、母親・女性がプラットフォームを作ったうえで初めて可能になっていることが多いんです。例えば、父親がPTAや自治会の役員に積極的に出ていくのにも、母親が裏で去年はどうやっていたかなどを、友人・知人・近隣の人たちから情報収集することによって、かろうじて上手くやるという場合があります。母親・女性がプラットフォームを作ったうえで、かろうじてその土俵の上に乗っかりながら社会関係のメンテナンスを父親がするといった状態です。このような場合、父親は、自分の「土俵」がどのようにできあがっているかについて意識することは、ほとんどありません。実質的な「縁の下の力持ち」を妻が担うことで、なんとか家族の社会関係のメンテナンスが可能になっているのにもかかわらず、夫は、妻が社会関係のメンテナンス・コストを支払っていることで自分たちの子育てが円滑にいつているのだ、と意識することは少ないんです。こうした状況の結果、夫婦によっては「事あるごとに衝突する」ようになることもあります。

女性によるプラットフォームの形成のうえで、男性のケアが可能になるという状況は、育児だけではなく、介護においても同じようなケースがあります。あとの平山亮さんのご報告にもあるかもしれませんが、夫が老親の介護を担う場合でも、どこのホームヘルプサービスの事業所が良いか、どこのケア・マネージャーに相談するのが良いか、どこのデイサービスを利用すればうまくいくことが多いとか、そういう情報のネットワークみたいなものを、妻が形成していることは少なくはありません。一見すると、男性が「主たる介護者」として、自分の母親の介護を積極的に担っているかのように見えますが、生活・生存に欠かせない重要な情報のリソースを調達し、裏で支えているのは、圧倒的に妻であることが多く、しかし、その負担が意識化されていることは、ほとんどないのです。

社会関係のメンテナンス・コストをめぐる葛藤と争い

次に指摘しておきたいのは、夫が家事・育児に積極的に関わろうとしている共働き夫婦でさえも、子どもの社会関係のメンテナンス・コストをめぐる葛藤と争いが生じるという点です。父親が母親グループに参入するケースも（多くはありませんが）たまにあります。例えば、Aさんは、学校関連の「主婦を前提とした付き合い」には一切関わっていませんが（保育園時代には友だちの母親ともよく連絡を取ったりしていましたが、高学年になると減少したと言います）、実は息子が希望して入ったサッカー少年団の世話や諸連絡を、一手に引き受けています。もともとAさんの妻は「土日の当番や試合に行くとか、メールの連絡といった（母親の）負担が大きいから私は反対。私にはこれ以上できない」

と息子がサッカー少年団に入ることに對して異を唱えていたのですが、「息子がどうしてもやりたいと言っているのだから、連絡や世話は俺が全部やる」と言って、Aさんが強く妻を説得したのです。妻はこう言っています。

「夫は、母親（だけ）のグループチャットに入って LINE で連絡を取りあったりしていますが、よそのお母さんからは『なんで母親じゃないの?』と見られますし、『変わっている』と言われてしまうのです。私も息子の様子を見に行つてあげたいとは思いますが、そうすると私と娘が一日中付き合わされます。結局、ただでさえ忙しいのに土日も潰れてしまいますし、家族はバラバラです。（母親仲間から情報が入っていたので）こうなることが分かっていたので反対したのです。それでいつも喧嘩になるのですが、夫は『ちゃんと事前に相談したじゃないか』と言うので、『賛成はしていない。ただでさえ忙しいのに、なんであえて大変な道を選ぶのか、そもそもこの選択には反対だった』と返すと、『もとの話を蒸し返すな』となり、言い争いになるのです」と語っています。

このように、Aさんのケースのように、子育ての考え方や価値観の相違によって、夫婦の見解が大きく食い違い、夫婦間でコンフリクトが生じることは少なくありません。妻が子育てを一手に引き受けている状況のなかでは、良くも悪くも妻が自らできる範囲のなかで（コスト計算をして）行為を選択します。一方で、夫婦で子育てを分担すればするほど、「そもそもどちらの判断によって選択したのか」が後々まで“喧嘩の火種”になることがあります。妻は、母親集団や地域の情報がありますので、そこでの情報をもとに選択します。他方、夫は、情報のネットワークがほとんどないまま、妻の言葉を使えば「当てずっぽう」や「場当たり的」に選択するので見解が食い違い、衝突が生じる、ということがあります。とりわけ、母親は母親仲間からの情報収集・同調圧力のなかで、「今の時代は昔とは違う」という意識に縛られて塾や習い事に高いコストをかけようとし、父親にもそうした子育てコストを積極的に果たしてもらいたいと思っていますが、夫からは期待する回答が得られません。

加えて、夫の考えを優先して選択した場合、夫婦の葛藤や軋轢は幾重にも深くなるということもあります。Aさんは、「子どもが幼いうちは、保育園の先生や保護者との関わりだけだったので、家事や育児について『夫婦のルール』で、『自分たちの世界』だけでうまくいっていました。けれど子どもが大きくなり、他の人たちと付き合わざるを得なくなつてから、肉体的にはずいぶん楽になったのに、夫婦で考え方がずれることが多くなりました」と語っています。このように、社会とのインターフェースが増えるほど、実は、夫婦間分業と選択をめぐるコンフリクトが生じやすい、という状況が多々あります。“目に見える”家事や育児では平等に担っていたとしても、“目に見えない”社会関係のメンテナンス・コストについては、圧倒的に非対称的であることが少なくありません。

Aさんのケースで、もう1つ面白いエピソードをご紹介します。Aさんは、母親同士の付き合いに入ることに ついて、次のように言っています。

「私だけ（サッカーチームの）母親たちの LINE に入っていますが、妻を矢面に立たせ

ることがないようにしていますし、そんなに気にしてはいません。ただ、付き合い方が難しいんです。例えば、LINEのグループチャットで、あるお母さんが『子どもが足首を骨折したのでしばらく休みます。』と連絡してくると、他のお母さんは次々に、『お大事にo(´・ω・´)o』とか絵文字やスタンプで返事をしていますが、私は控えめに『お大事にしてください』くらいの文章を、ちょっと時間を空けて送るなどしています。ヘタに絵文字やスタンプなどを使って中に入ろうとすれば、『ちょっと変だよ』と言われかねないし、『当たり障りなく、お父さんとして立ち振る舞う』のが結局、面倒がないんです。すると、私も妻もお母さん同士で変な気遣いをしなければならぬ人間関係に巻き込まれないし、試合のときには他の子どもを（自分の）乗せて連れていったり、練習のときには球拾いやグラウンドの整備をしたりすれば、『あそこの家はお父さんが中心に関わりたんだ』ってなるので、妻も嫌な思いをしないで済みます」と語る。

このように、実はAさん本人は妻に最大限気遣いをしているつもりではあるんですが、社会関係のメンテナンス・コストは圧倒的に妻が担っている、という状況にあるのです。

ところで、Aさんは、母親コミュニティの中で「女性的・お母さんのモード」で関わるのではなく、あえて過剰なほど「男性的・お父さんのモード」で振る舞うという戦略をとることによって、「主婦を前提にした付き合い」への参入が可能になっています。なぜかと言うと、夫婦の役割分担を超えて父親が「子育ての社会関係のメンテナンス・コスト」を担う場合、あえて「お父さんの・男性的モード」で関係を形成することで、母親に期待されている役割が免責されると同時に、父親に期待されている役割を担うことが可能となり、それが結局、最小の社会関係のメンテナンス・コストになるからです。例えば、母親に期待されている役割、例えば、暑い日には子どもの水筒に水を補充してあげるとか、寒い日には温かいスープを用意しておくとか、そういったことが免責されます。逆に、父親に期待されている役割、例えば送り迎えやグラウンド整備などを担うことが可能になります。

一見すると、社会関係のメンテナンス・コストを夫婦間で平等に分担しているかのように見えますが、じつは対外的な社会関係では男女間でのジェンダー役割が保たれる形になってしまっているんです。Aさんのように、積極的に母親コミュニティに入り、社会関係のメンテナンスを担おうとすればするほど、逆説的に、「父親的・お父さんのジェンダー役割」を過剰なほど演出してしまおうとする、といったことが生じてきます。これでは、結局、最初の社会関係のメンテナンス・コストと何も変わっていません。

全体からコスト算出する母親／部分的コスト算出しかしない父親

次に指摘しておきたいのは、母親は子育て全体からコストを換算する傾向がありますが、父親の場合は、部分的にしかコストを換算していない、という点です。つまり、父親は“目に見える”子育てしか想定していないことが多いので、母親がコストとして想定している、「社会関係をいかに良好に保つのか」という点などを、子育てのコストとして換

算していないのです。こうした状況では、母親のコストが支払われなければ夫婦間での子育ては成り立たないにもかかわらず、父親は母親の貢献を「当たり前」とみなして評価しないばかりでなく、むしろそのコストを不必要なものだと見なす傾向さえあります。あるいは、母親が膨大なコストを支払っているにもかかわらず、そのことを意識せずに「私たち夫婦はフィフティ・フィフティ」とノーテンキに主張し、周囲の父親との比較だけで「自分は子育てを担っている」と考え、夫婦間コストの差異を比較考量していない光景がしばしば見られます。

母親は、限られた時間の中で、子どもにとってよりよい成長ができるように勘案し、家事や育児や家族生活のそれぞれにどのようなコストをどれだけかけるべきか、かける必要はないのか、かけることでの利得と損失は何であるのかを総合的に考えるような「フルセット型子育て」であることが多いが、父親はコスト意識が希薄であることも多く、家事は家事、育児は育児とバラバラに考える「ピンポイント型子育て」であることが少なくないんです。

例えば、Aさんの場合、サッカー少年団に息子を入れることについて、母親は「サッカークラブに入れることは、共働き夫婦である私たちにとっては、余りにもコストが大きい。それゆえに、今回は諦めざるを得ないのではないか。その分、(平日に家族で接する時間が十分にとれないことが多いので) 土日は家族と一緒に過ごす時間に当てたい」と子育て全体を勘案したうえでコスト計算をしています。それに対して、父親は「子どもの成長のために良いのではないか。男の子はたくましさ必要」と、ピンポイントに「教育」のパーツだけを見てコスト計算し、「送り迎えや親の連絡だったらできるから、俺がやるよ」と、部分的なコスト計算をしているのです。両者のコンフリクトはこのようにして増大していく。

このように、母親の「フルセット型子育て」に対し、父親はコスト意識が希薄であることに加えて、家事は家事、育児は育児、家族生活は家族生活と、それぞれをバラバラに考えるような、「ピンポイント型子育て」であることが少なくない。つまり、父親にとって“見やすい”子育てコストについては、自分と妻のそれぞれの貢献度・寄与分は認識されているが、“見えにくい”社会関係のメンテナンス・コストの負担分・貢献度・寄与分については、ほとんど意識化されていないということです。また、母親と比べると父親は子育てコストを低く見積もる傾向があります。父親にとっての「子育てコスト＝生存コスト」と想定されていることも少なくなく、「元気であればいいじゃないか。健やかに育てているのだからいいじゃないか」という程度に考えてしまい、よりよい環境で過ごす、きめ細かい配慮をする、親族間・地域間をバランスよく保つ、というコスト計算は母親に比して想定されていない。つまり、最適な子育てコストの下で、学校や地域で社会関係を良好に保つということは、あくまでも「エクストラ」の行為としてしか認識されていないのです。母親にとっては、子育てに重要な社会関係のメンテナンス・コストが、夫にとっては「エクストラ」なコスト、「おまけ」程度にしか想定されていないことも少なくありま

せん。夫婦間での圧倒的なコンフリクトが生じる背景には、このようなケアをめぐる圧倒的なジェンダーの非対称性やギャップがあるのです。

息子は社会関係のメンテナンス・コストを担うことはない

最後に指摘したいのは、男性が「主たる介護者」としてケアしているケースにあっても男性は社会関係のメンテナンス・コストを担うことが少ないという点です。

息子として実の母親の介護を担っているCさんを見てみましょう。Cさんは「主たる介護者」として、近隣に住んでいる母親のところへ通い、介護にあたっていますが、家事は全面的に妻に依存しています。夫のための食事を作っているのは妻ですし、母親のための食事の準備や着替えの用意や掃除も妻が担っています。平山さんも本の中で書かれていらっしゃるんですが、妻は「介護の基礎」となる家事を通して夫を支えているが、そのことを夫が強く意識することはあまりありません（平山亮『迫りくる「息子介護」の時代』（光文社、2014年））。加えて、それまで形成してきた周囲との社会関係を保ちながら情報網を駆使し、各種サービスを利用することを促すのも妻であることが多いです。しかし、このような場合でも、夫は「自分の親なのだから、自分がやらなきゃ」などと言い、実母の介護を引き受けたことは強調しても、「縁の下力持ち」は妻であり、妻がケアのプラットフォームを作ったのだと、強調することはほとんどありません。妻の「家事」に対して感謝を表明することがあったとしても、妻が支払っている膨大な社会関係のメンテナンス・コストを意識化することはなく、日常の社会関係が適度なコストを支払うことでかろうじて保たれていると認識することはないのです。加えて、夫が日常の社会関係のメンテナンス・コストを支払わないため、実母は自宅で誰とも話さず、閉じこもりがちになっています。それを気に留めて、たまに夫の妹に連絡を取ったり、食事やお菓子を持参したりするのも、また妻なのです。こうした妻による社会関係のメンテナンス・コストによって、(Cさんの)妹が実母のところへたまに顔を見せると母親が嬉しそうな表情で「にこっ」と笑うといった状況が生まれています。その意味で、母親の社会関係をかろうじて保っているのも「裏方」である妻であることが少なくありません。

Cさんの妻は以下のように述べています。「夫は母の介護を一所懸命にしますが、妹にいろいろ言われるとカチンとくるようで、きょうだいとも関わろうとしないし、寄せ付けようとしなくていいところがあるのです。すると、お母さんも寂しがると、関係も悪くなるので、夫には身体を使う介護などをメインにやってもらって、私は親族と連絡を取り合ったり、食事やお菓子を持っていったりしています。(夫は)介護がメインになってしまうので、それだけでは(十分ではない)と思って、やっています」と語ります。

息子にとって「介護コスト＝最小生存コスト」はマテリアルな「介護」の水準で想定されており、「(実母が)子どもたちや友だちと会ってコミュニケーションをとったり、趣味や好きなことに時間を費やす」などの社会関係は「エクストラ」の行為としてみなされています。そうした「エクストラ」のためには、妹を含めた周囲との社会関係が良好に保た

れていなければなりません、夫が周囲を寄せ付けないがために、母親の社会関係は絶ち切られていくのです。ここは一般化することはできませんが、どうしても夫は「介護コスト＝最小生存コスト」と非常に低く見積もっているがゆえに、母親がそれまでに形成してきた社会関係、例えば娘との関係、近隣との関係などが絶ち切られていくことが、息子が介護をする場合に生じる蓋然性が高い、ということがあります。

もう一つ重要な点は、息子の社会関係です。息子にとって、家族以外の唯一の社会関係は「会社の仲間との付き合い」であることがあります。Cさんは次のように言います。

「会社の仲間には介護のことは話しません。話したところで盛り上がりませんし、(自分にとっても) 介護よりも会社の話のほうが楽しい。パーッと違う話をして気分転換したいのに、飲みながら介護の話をしたのでは逆に気分が落ち込むでしょ。会社での気心の知れた仲間が一番楽」と語る。

ここが重要なところですが、少なくともCさんにとって「会社の仲間」は、(会社という組織によってセットアップされた) 社会関係のため、メンテナンス・コストをそれほどかけずとも保つことができ、私的領域とは分離された、気分転換のできる空間になっています。つまり、そもそも会社が社会関係をセットアップしてくれているので、日常的に細やかに連絡を取りあうとか、やり取りをするといった最小のメンテナンス・コストでそれなりに「キープ」できる社会関係資本になっているのです。

もっとも「会社の関係」はアイロニカルでもあります。かりにCさんが仕事を辞めてしまったとすると、会社がセットアップしてくれて、最小のメンテナンス・コストで保つことができた、Cさんにとって唯一の社会関係資本の「会社の仲間」さえも絶ち切られてしまう。そうすると、最小コストの社会関係資本に寄って立ってきたCさんには、それ以外でメンテナンス・コストを支払って保ってきた社会関係がないがために「社会関係ゼロ状態」になってしまうんです。その意味で、Cさんのアイデンティティや社会関係を保つためには、実は「仕事を続ける」ことが重要であり、職場から離れることは大変リスクなことなのです。

以上のように、息子介護における社会関係のメンテナンスは「縁の下の力持ち」たる妻によってかろうじて可能になっていると同時に、息子にとって重要な社会関係である「会社の仲間」は最小コストでメンテナンス可能であるがゆえに辛うじて保持されています。

男がケアをするということ

今回は、育児のケースを2つ、息子介護のケースを1つ、事例としてご紹介させていただきましたが、残りの限られた時間で、この事例から考えられることを「ケアをめぐるジェンダーの非対称性」という問題を中心に紹介したいと思います。

男性が積極的にケアをする場合でも、「縁の下の力持ち」である妻によってケアは支えられていることが少なくない。とりわけ「社会関係のメンテナンス・コスト」は圧倒的に妻によって担われ、そうしたコストがあって初めて夫によるケアが可能になっている。に

もかわらず、夫にはそうした社会関係のメンテナンス・コストはほとんど意識化されていません。こうした状況に対して、妻は「夫が気付かないのも仕方ない」と思いながらも、ケア・コストの非対称性を感じたり、不満をぶつけるということもあります。

つまり、家族内部では、男性が積極的にケアを担うことで、性別役割分業に呪縛されない生き方をしているかのように見えるが、その実、ジェンダーによって配置・配分された社会関係（学校や習い事関連の母親コミュニティなど）に関わらざるを得ないときには、妻が社会関係のメンテナンス・コストを支払うことを余儀なくされます。また、妻は、そうした母親コミュニティに関わることによって各種の情報を得て、子どもの利得と損失を換算するため、このコミュニティに関わらないようにすることも難しい。そうすると、必然的に妻が圧倒的なケア・コストを担っていくことになる、という構造になっています。

私が去年、パークレーですごく気が楽だと思ったのは、こうしたジェンダーで分離された空間や社会関係が私たちの社会に比して圧倒的に少なく、男女ともにケアにかかわる社会関係のメンテナンス・コストにアクセスできる環境が整っていた、ということです。もちろん、日本でも母親のコミュニティに男性が参加することもあります。その際は、「男性的・お父さんのモード」で関係を形成することが多く、女性に期待される役割を免責し、男性に期待されている役割を担うことになり、結局、それが最小のメンテナンス・コストになってしまう。結果、夫婦間でもコミュニティ内部でも、ジェンダーの秩序が維持されていく。

男性にとって“見えやすい”ケア・コストでは、自分と妻のそれぞれの貢献度・寄与分は認識されていることも少なくなりませんが（つまり、どれだけ物理的・時間的に家事や育児や介護を担っているかということは認識されていますが）、家族関係をうまく保つ、学校や習い事の人間関係をうまく保つ、様々な人や機関と連絡を取りあいながら情報収集する、といった「社会関係のメンテナンス・コスト」はほとんど意識されることがありません。男性にとって最適なメンテナンス・コストのもとで、学校や地域での社会関係を良好に保つという行為は、「エクストラ」としてしか認識されていないことが多い。

女性は、限られた時間的・物理的制約のもと、ケアの受け手にとってより良い環境を勘案し、いかなる行為にどれだけのコストをかけるか、コストをかけることで家族にとっての利得と損失（プラスとマイナス）がなんであるかを考えることが少なくないが、男性は、そのようなコスト感覚が希薄であることが多く、家族全体の最適バランスを考えたコスト計算はもっぱら女性によって担われていることが多いんです。そのような意味で、男性はもともとコスト計算の感覚を前提に動いていないことが多い。

加えて、男性にとっての家族以外の重要な社会関係は、会社の仲間との付き合いであることが少なくない。男性にとって会社の仲間は、会社という組織によってセットアップされた、最小のコストでメンテナンス可能な社会関係であるがゆえに、しばしば男性にとっては唯一の重要な社会関係資本となってしまうている。したがって、かりに現行の社会制度を前提にするのであれば、介護・育児休暇を取得してケアに専念せざるを得ない状況が

もたらされたりすると、それは男性の社会関係を断ち切ってしまうがゆえにリスクでもある。育児・介護だけに専念する状況が作られると、逆に男性は、今まで形成してきた会社の仲間との関係も断ち切られてしまうゆえ、非常に強い孤独に陥ってしまうことにもなりかねない。もっとも介護・育児休暇は、短い期間だけでは何ともならないので、もともと使えない制度なのですが、それ以上に、会社との人間関係さえも絶ち切られると、非常に強い孤独状態に陥ることにもなりかねない。しかし、育児・介護に関わりつつ、地域などで新たな社会関係をメンテナンスするかといえばそれも難しい。では、会社の仲間に代替する社会関係が何かあるかという、なかなか少ないのが実情で、唯一のサポート役が妻だったりするのです。その意味で、男性にとっても最も強力かつ唯一の社会関係資本は「会社」と「妻」になってしまっていることが少なくないのです。

社会関係とは、一朝一夕に形成できるものではありません。日々の長い年月をかけて、地域との人間関係ができたり、子どもを通じて親同士の関係ができたり、あるいはその他の関係もできたりします。それらは日々、メンテナンスすることで成り立っていますが、男性はそのコストをあまりかけないがゆえに、会社の人間関係を絶ち切られると強い孤立状況に陥りかねません。仕事を辞めざるを得ず、非正規雇用や無職のままでケアを余儀なくされる状況であれば、男性の寄って立つ場所を奪いかねず、男性のアイデンティティがズタボロになる状況を招きかねない、ということです。つまり、男性の仕事のあり方、仕事と介護をいかに両立するかということ以上に、自分のそして他者の日常での社会関係をいかにメンテナンスしていくのか、その最適なコストをいかに担っていくのか、ということが重要になるのです。もちろん根本的には、仕事を続けながら育児や介護ができる制度を作ることが重要ですので、こうしたことについては、シンポジウムのお話したいと思います。

育児であれ介護であれ、ケアを十分に保障する社会設計を構想すると同時に、各種の社会関係のメンテナンス・コストをめぐるジェンダーの平等をいかに担保するか、ということが問われています。要するに、こうした「エクストラ」の部分も入れると、依然、男女・夫婦におけるケア・コストは圧倒的に非対称な状況にあります。私自身もケアを担っていると、家事や物理的なケアにはまったく収まらない、各種の「エクストラ」を期待されたり、担わざるを得ない状況であることが少なくなりました。その「エクストラ」の部分をどう担っていくか、そこでのジェンダーの平等をどう達成していくか、そのための設計思想をどう考えるのか、男性にとって仕事とケアが両立可能な制度設計をどう構想するのか。そのようなことがまさに問われていると思います。

ただ、繰り返しますが、本日、私がお話しさせていただいたのは、共働きで家事・育児を積極的に担っている夫の夫婦のケースであり、また夫が「主たる介護者」として介護に参加している夫婦の限られた事例ですので、現実にはもっと「手前」のところで、ケアをめぐる不平等やジェンダーの非対称性を考えなければなりません。しかし、一見すると、夫婦間で「平等」に担っているかのように見えるケースであっても、圧倒的なケアをめぐ

るジェンダーの非対称性があるということをお伝えし、シンポジウムへの問題提起とさせていただきます。ちょうど時間がきましたので、私の基調講演はここまでとさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

第二部 ケアラーとしての男性のいま

「ケア」が育む持続可能社会」

土堤内 昭雄

土堤内：みなさん、こんにちは。ニッセイ基礎研究所の土堤内と申します。私は、もともと建築や都市計画を専門にしています。特に社会学をやっているわけではなく、極めて門外漢でありますので、今日は自分の体験をもとにお話をしたいと思います。今日取り上げたいテーマは、『ケアが育む持続可能社会』です。ここでいうケアの概念は、介護だけではなく、いわゆるお世話をするという広い意味で捉えているので、子育てや病気の人の看護、自分が病気になった場合の治療をすることも当てはまります。今日のお話は、そのなかでも典型的なケアである、子育てと介護についてです。この2つはどこが違っていて、どこが共通しているのか、そのようなこともお話ししたいと思います。

最初は、子育てについてです。私は25年前に離婚して、以来、当時2歳と3歳だった、2人の男の子を育ててきました。当時は、小さな子どもには母親を、という3歳児神話のようなものがあり、男性である私が2人の子どもを育てていけるのか、という不安があったことは確かです。しかしながら、とにかく見様見真似で子育てを始めました。そのなかで、柏木恵子さんの「父親の発達心理学」という1冊の本にめぐりあいました。いわゆる育児書ではなく、子育てを通じて親がどのように成長発達するのか、ということの研究した本です。大きく2つのことが書いてありました。1つは、親は子ができただけで親になるのではない。親は子を育てながら親になる、ということです。確かに、子どもを産むのは女性ですが、女性も子どもを産んだだけで親になるのではなく、子どもを育てながら徐々に親になっていく。男性は、生物学的に出産はできませんが、子どもを育てながら親になることはできる。そういったことを本のなかで知りました。もう1つは、よく言われる、育児は「育自」、つまり子どもを育てる育児は親が自分を育てることもある、ということです。子育ては、ただ子どもが育っていくだけではなく、いろいろな課題や問題に遭遇し、子どもと親と一緒に乗り越えていき、その中で親も1人の人間として、大人として成長していく。

私は、子どもを育てるなかで、3つのことに気が付きました。1つ目は、子育てとは「子育ち」を支援すること、です。子どもが5歳になったときに、自転車に乗る練習をしました。それまでは3輪車に乗り、そのあとは後ろに補助輪の付いた自転車に乗っていました。長男が5歳の夏休みのときに、補助輪を取って普通の自転車に乗るための練習を始めました。私が自転車の荷台を押すと、子どもはすごく怖がっていました。「お父さん、絶対に手を離さないでね。」「大丈夫。絶対離さない。持っているからね。」と言っ